

第33回BELCA賞 選考総評

BELCA賞選考委員会 委員長 三井所 清典

BELCA賞は、良好な建築ストックが現代社会の中で生き生きと活用され、未来に引き継がれることを目的に設けられた賞である。賞を2部門に分け、長年にわたり適切に維持保全され、今後も長期保全の計画がある模範的な建築物をロングライフ部門とし、社会の変化に対応したリフォームにより、見事に蘇生した建築物をベストリフォーム部門として選考、平成3年から昨年まで表彰件数315件を数えている。

BELCA賞への関心は年々高まっているが、現代社会で活用されるためには、ロングライフ部門でも耐震改修や設備の抜本的現代化が必要であり、ベストリフォーム部門では建築寿命の長期化に伴い、利用者の建物への愛着を重んじる傾向を深めている。そのような事情から近年は両部門の表彰件数は定めず、合わせて10件以内を選考することになっている。本年度はロングライフ部門4件、ベストリフォーム部門6件となった。

今回表彰されるロングライフ部門では、

- ・所有者の建物を残したいという願いを長寿命のための改修費、維持管理費を捻出できるビジネスプランのもとに改修され、運営されてRC造の都心の住宅。 96歳
- ・創建当時の建物内外の佇まいをキャンパスの質として大切にしながら手を加え、維持保全が確実にされていて、その環境が周囲の住民にも親しまれている女学校。 93歳
- ・経済的技術的に豊かでなかった戦後の意欲あふれるモダニズム庁舎建築で、その質を尊重する耐震改修と執務空間、内外装が改修された県庁舎。 52～67歳
- ・街のような建築を意図した、通り抜け通路・書店・劇場・小さな飲食店・商店等が入るビルの耐震改修で、通路に開く店構えの工夫等で質を維持した駅前ビル。 59歳

ベストリフォーム部門では、

- ・古い造り酒屋を改修して耐震性と防火性を向上させ、現行法規を満たす宿泊施設に用途変更した建物。新しいビジネスモデルで既存の宿場町と共存する施設。 230歳
- ・京都の町並みを形成している創業の社屋、住居、倉庫の意匠を大切に扱い、一部に新築ともてなしの意匠を加えて宿泊施設に用途変更した施設。 90～93歳
- ・2度目のオリンピックのために安全と機能性向上、バリアフリーをはかり、文化的なイベントにも使えるような様々な改修技術を駆使した屋内競技施設。 59歳
- ・円筒形のコア1つで南北に張り出す執務空間を支える象徴性の高い建物を保存するため高度な耐震改修技術等で長寿命化をはかった新聞社・放送局の東京支店。 56歳
- ・耐震改修を機に内外装のデザインの質の向上、動線の整理等を行い、様々な機能を満足させ、庭園の池とも一体的な建物となるよう再生した神社の会館。 54歳
- ・発生する資源を循環使用する環境配慮の改修で、カーテンウォールを外したバルコニーに階を通して立て並べられた吉野杉の列柱が新しい魅力の事務所ビル。 34歳

今年はロングライフ部門の表彰4件、ベストリフォーム部門が6件で、いずれも長寿命化を目指すもので、外観上は保存重視が8件、再生魅力化が2件であり、今後寿命を伸ばしていくことが期待される。

表彰建築物の建築年齢を見ると、最高齢は230歳の木造の江戸時代後半の民家で群を抜いている。96歳、93歳、90歳の3件はいずれも昭和初期の建築で、関東大震災後の耐震構造が確立した後の恵まれた時代の建築で、RC造の住宅と学校及び木造の住宅規模の企業施設である。67歳の庁舎は戦災復興期終盤の建築で、建築部材等が現在と違って貧しく同年輩の建築の多くが取り壊される中で、大切に保全されている遺産的な建築である。59歳の2件と56歳、54歳の建築合わせて4件は高度経済成長期の前半のもので、その中でも恵まれた建築たちである。最も若い34歳の建築は平成初期の生まれのオフィスビルで、環境の時代に合わせてデザインの趣を一変させている。今後超高齢、高齢の建築を含め、表彰の建築たちがどう活用され、維持保全されて成熟していくか楽しみである。

最後に、惜しくも選に漏れた建築物については、充実した内容で再度の応募を期待したい。また、今年の表彰では東京が6件と多かったが、これ迄表彰建築物のない県がまだ6県ある。建築物の長寿命化の普及のために、今後も多くの地域からの応募をお願いしたい。